

フードシステム

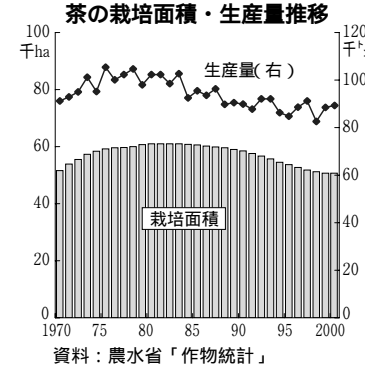
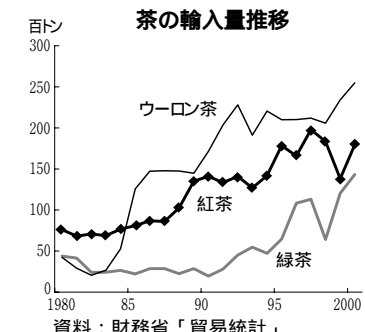
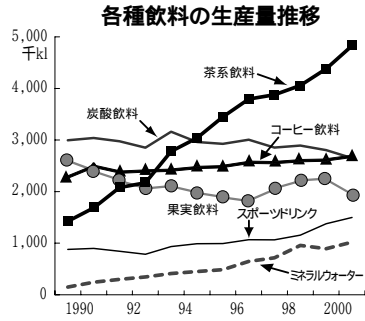
茶系飲料の急成長と国内茶生産

一・成長する茶系飲料

近年、茶系飲料が急成長している。二〇〇一年における茶系飲料の生産量は四八三万 kl で、九〇年に比べ三・四倍となり、この間、年率約一二％で伸びてきた。茶系飲料が飲料全体(牛乳を除く)に占める割合は三〇・四％となっており、コーヒー飲料、炭酸飲料、果汁飲料を大きく上回っている。この要因として、茶系飲料が消費者の健康志向にマッチしたことで、メーカーのマーケティングの成功、ペットボトルの普及があげられる。

茶系飲料を種類別に見ると、緑茶一四二万 kl 、ウーロン茶一四〇万 kl 、ブレンド茶八〇万 kl 、紅茶七八万 kl 、麦茶二六万 kl 、その他一七万 kl である。茶系飲料には一種の流行のようなものがあり、ウーロン茶は九〇年代前半に、紅茶・ブレンド茶は九四年から九七年に急成長し、その後、停滞ないし減少しているが、緑茶は一貫して増えており、特に二〇〇〇～〇一年の二年間で倍増した。このように種類別に見ると変動が見られるものの、茶系飲料全体では持続的に伸びてきた。

二・増大する茶の輸入
こうしたなかで、近年、茶の輸入量が



三・国内茶生産の動向
二〇〇〇年の茶栽培面積は五万四千 ha (八〇年比 一七・四％)、茶生産量(荒

増大している。二〇〇〇年の茶類(紅茶+緑茶+ウーロン茶他)の輸入量は五八千トンであり、九〇年の一・七倍になっている。この輸入量は国内の荒茶生産量の六五％にあたり、緑茶の輸入量だけみると国内荒茶生産量の一六％にあたる。種類別にみると、ウーロン茶二五千トン、紅茶一八千トン、緑茶一四千トンであり、特に近年は緑茶の輸入量増大が著しい。なお、緑茶の八八％、ウーロン茶の九五％は中国からの輸入である。輸入緑茶の約半分は飲料の原料として使われ、そのほかほうじ茶、ティーバックの原料等に使われている。輸入緑茶の価格は国産茶の平均価格の六分の一程度であるが、飲料価格に占める原料茶コストの割合は小さく、国産原料にこだわっている茶系飲料も多くある。

茶)は八万九千三百トン(八〇年比一二・七％)であり、わずかながら減少傾向にある。生産農家戸数は一九八〇年には七五万戸あったが、九九年には二四万戸に減っている。なお、県別にみると、静岡県が全国の栽培面積の四一・七％を占め、第二位の鹿児島県が一六・〇％を占めている。国産の茶のうち一番茶は玉露等に使われ、飲料用に使われるのは主に二番茶以降であるが、茶系飲料の増大にもかかわらず国内の茶生産が減少しているのは、茶葉(リーフ)としての茶の消費量が低迷しているとともに、茶系飲料の原料の輸入依存度が増大したためであると考えられる。

輸入茶と国産茶はある程度棲み分けができており、輸入の増大にもかかわらず国産茶の平均価格は横ばいで推移してきたが、輸入茶と競合する二番茶以降の価格は低下傾向にある。(清水徹朗)